

## 富山大学教育学部及び附属学校園共同教育・研究プロジェクト

長谷川 春生

### 1. はじめに

富山大学教育学部には、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の4つの附属学校園がある。「富山大学教育学部及び附属学校園共同教育・研究プロジェクト」の前身となるプロジェクトは、平成12年度にスタートしている。その後、教育学部から人間発達科学部への改組があり、現在は、金沢大学との共同教員養成課程として、再度、教育学部となっているが、継続して活動が進められている。

附属学校園の教員も学部・大学院の教員も、それぞれに多用の中、自主参加を原則として、協力してプロジェクトを継続してきている。そこで目指したものは、教育実践の向上につながる共同研究や子どもたちの成長につながる活動であった。附属学校園にも、学部・大学院にも構成員の入れ替わりがある中で、このような自主的な活動が継続している。例年、10以上のグループが作られ、延べ100名以上が参加している。このように継続されている理由は、このプロジェクトによる活動を進める中で得られる成果が、子どもたちの学びや育ちに確実に貢献しているという実感があるからと思われる。

このプロジェクトは、研究を中心としたプロジェクトとしてスタートしたが、その後、それぞれのグループ内での子どもたちの学びや育ちに関わる情報共有、意見交換、学習会等も多く実施されるようになり、それらが総合的に、附属学校園の子どもたちの学びや生活に大きく役立つこととなった。このようなことから、令和5年度より名称の一部を改め、「共同研究プロジェクト」から、「共同教育・研究プロジェクト」としている。

### 2. 各グループの活動内容

令和6年度は、表1のとおり、13のグループが作られ、附属学校園と学部・大学院の教員、延べ109名が活動に参加した。教科教育に関わるグループだけでなく、健康教育、幼少の接続、自立活動、ICTの教育利用、特別支援教育コーディネーターの連携というグループも作られている。メンバーの構成はグループによって異なるが、その多くは複数の校種の教員と学部・大学院の教員から構成されている。そのことにより、例えば、幼稚園、小学校、中学校の学びを系統的に考えることができたり、幼稚園、小学校、中学校における特別な支援を必要とする児童生徒への対応を、特別支援学校の教員とともに検討したりすることもできている。本プロジェクトは教員の自主的な活動であるため、参加希望者が集まることによりグループが作られる。そのため、設置されるグループは毎年少しずつ変更されるが、ほぼ同一の規模や内容で活動が進められている。

### 3. 「特別支援教育コーディネーターの連携」グループの活動

本プロジェクトは、学部共通経費からの予算を各グループに配当し、活動を進めているが、「特別支援教育コーディネーターの連携」グループは、さらに学部プロジェクト推進経費を申請し助成を受けて、令和6年度の活動を進めた。活動内容を研究のみに限定しない例として紹介する。具体的内容は下のとおりであるが、その結果については、アンケート等を実施し、教育効果についても検討している。

表1 各グループの活動内容

No.	グループ名	活動内容
1	国語科教育	研究発表会や教育実習などの機会を通して、よりよい国語科の授業のあり方を探る。
2	社会科教育	楽しくわかる社会科の授業づくりを考える。
3	算数・数学科教育	算数・数学科の研究授業に関して、小中連携の観点から教材研究や指導法の工夫について研究を行う。
4	理科教育	実際の授業を通じた授業実践の検証、および実践内容を踏まえた理科教育における教授法・学習論の研究を行う。
5	音楽科教育	授業実践の立案および検証を軸とした小・中学校と大学との連携による音楽科教育研究の在り方考える。
6	家庭科教育	家庭科の授業実践の開発と研究を行う。
7	保健体育科教育	授業研究を中心とする保健体育科の研究活動を実施する。
8	健康教育	児童・生徒の生活習慣について実態を捉え、心身ともに健康な生活を送るための支援のあり方を探る。
9	英語科教育	研究発表会などを通して、英語科の授業づくりや授業研究のあり方考える。
10	幼小の接続	幼稚園（生活単元学習）・小学校（生活・総合）の授業を分析・検討し、よりよい支援のあり方を探る。
11	自立活動	特別支援教育における自立活動の意義と内容について学び合うとともに、授業実践等を通して研究を行う。
12	ICTの教育利用	教育におけるICT活用の在り方考え、授業実践等を通してICT活用の効果を明らかにする。
13	特別支援教育コーディネーターの連携	事例検討を通して、コーディネーターの役割や校内での協力体制の在り方、特別な支援を要する児童生徒への適切な対応について考える。

(1)研修機会の確保と研修内容の充実による「附属学校園教員の専門性向上」

- ① 附属学校園で学びにくさを抱える子どもについて、学部教員と附属学校園の教員との定期的な相談会を行い、適切な「子どもの実態把握」を行う。
- ② 附属学校園に在籍する子どもの実態から教育活動を見直し、子どもの学びと発達を支える視点で教育活動や教育的支援のあり方について検討する研修会を実施する。
- ③ 学部教員、附属特別支援学校教員、附属特別支援学校と連携している医師・臨床心理士・理学療法士・作業療法士による専門的な視点による研修会を実施する。

(2)専門的視点に基づく「子どもの『分かる』『できる』『もっと知りたい』」を実現する冊子と教材・支援グッズの提供

- ① 令和5年度に作成した「子どもの『分かる』『できる』『楽しい』」を支えるお助けブック」をもとに、附属学校園教員の意見を取り入れた「改訂版」を作成する。
- ② 新規に購入する教材や支援グッズの情報を追加する。
- ③ 「子どもの『分かる』『できる』『楽しい』」を支えるお助けブック 改訂版」を冊子としてまとめ、附属学校園全体で活用できるように配布する。
- ④ お助けブックに記載されている教材・支援グッズを研修会の機会を利用して紹介をする。
- ⑤ 教材・支援グッズの情報を定期的に提供し、貸し出し(具体的には座位を保ちやすいクッションや扱いやすい筆記用具など)を実施する。
- ⑥ 「お助けブック」の活用実態や、「役立つ」「グッズについて知りたい」「グッズを使ってみたい」等の先生方の意向について調査を実施する。

(3)子どもと保護者を取り巻く「支援・相談機関の確保」:「附属学校園の子どもと保護者を取り巻く支援・相談機関」、「外部通級・放課後個別指導の場」としての大学の活用

- ① 学校での一斉指導と個別の配慮、および大学での外部通級指導におけるそれぞれの位置づけと目的、具体的内容についての共通理解を図るために、定期的にケース会議を実施する。
- ② 対象とする児童のニーズや変容について、日常的に情報を共有するための方法を検討する(Teams や Google Classroom の活用)。

- ③ 教職大学院で学ぶ現職教員と附属学校園教員・特別支援教育コーディネーター・学部教員・学生が支援スタッフとしてチームを組み、附属学校園での教育活動および大学における個別支援に関わる。

#### 4. 今後の活動

令和6年度末に実施したグループの代表者による会議では、附属学校園の子どもたちのためになる活動ができたことがよかった、附属学校園と学部等の教員が協力し活動が進められたことがよかった、附属学校園と学部・大学院の教員との交流の場としてもよかった、というような意見が出された。また、附属学校園の教員にとって無理のない範囲で今後も活動が進められるとよい、というような意見もあった。このようなことから令和7年度も令和6年度までと同様の方向で活動を進めることが確認された。今後も、子どもたちの学びや育ちに貢献できる活動を、参加者の自主的な活動として進めていきたい。

(富山大学教育学部附属教育研究実践総合センター 教授)